

公園の花と毒蛾

小川未明

青空文庫

それは、広い、さびしい野原でありました。町からも、村からも、遠く離れていまして、人間のめつたにゆかないところにあります。

ある石蔭に、とこなつの花が咲いていました。その花は、小さかったけれど、いちごの実のように真紅でありました。花は、目を開けてみて、どんなに驚いたでありましょう。「なんとという、さびしい世界だろう。」と思いました。

どこを見ましても、ただ、草が茫々としてしげっているばかりで、目のとどくかぎりには、友だちもいなければ、また、自分に向かって呼びかけてくれるようなものもありませんでした。すぐ、自分のそばにあった、黒みがかつた石は黙り込んでいて、「寒いかな。」とも、また「さびしいか。」とも、声をばかしてくれません。

小さな、気の弱いとこなつの花は、どうして自分から、この気心のわからない、なんとなく気むずかしそうに見える石に向かって声をばかけられましょう。

花は、独りでふるえていました。ただ、やさしい眸で、自分をいたわってくれるのは、

太陽ばかりでありました。しかし、太陽は、自分ひとりだけをいたわってくれるのではなくありません。この広い野原にあるものは、みんな、そのやさしい光を受けていたのです。この石も、また、こちらの脊の高い草も、その光を浴びました。そして、それをありがたいたもなんとも思っていないように平気な顔つきをしていました。しかし、太陽は、けつしてそれに対して気を悪くするようなことがなく、平等に笑顔をもつてながめていました。

とこなつの花は、自分だけが、とくに恵まれたわけではないけれど、太陽に対して、いいしれぬなつかしきを感じていたのです。そして、どうかして、すこしでも長く、太陽の顔をながめていたいのだと願っていました。しかし、この高原にあつては、それすらかなわない望みでありました。たちまち、白い雲が渦を巻いて、空を低く流れてゆきます。それは、すぐに太陽を隠してしまえばかりでなく、あるときは、まったくそのありかすらわからなくしてしまうのでありました。

花は、この雲の出ることをいっていました。しかし、そばにあつた石や、あちらの強そうな脊の高い草は、平気でありました。花は、まだ、この雲は我慢でもできましたけれど、寒い風と雨と、そして、息のつまるような濃い、冷たい、霧とを、どんなにおそれたかしれ

ません。

「ああ、あの冷たい、身を切るような、霧の出ないようにはならないものか。」と、花は、しばしば、空想したのであります。

けれど、自然の大きな掟は、この小さい、ほとんど目に入るか入らないほどの花の叫びや、願いでは、どうなるものでもなかった。そして、夜となく、昼となく、深い谷底からわき起こる霧は転がるように、高い山脈の谷間から離れて、ふもとの高原を、あるときは、ゆるゆると、あるときは、駆け足で、なめつくしてゆくのでした。

その霧のかかっている間は、花は、うなされつづけていました。毒のある針でちくちく刺されるような痛みを、柔らかな肌感じたばかりでなく、息苦しくなつて、しまいは酔つたもののように、頭が重くなつて、足もとがふらふらとして起つていられなくなるのでした。そして、全身に悪感を感じるのでありました。

霧が去つた後は、風に吹かれてぼたぼたと滴るしずくの音が、この広い野原に聞かれました。しかし、この苦痛は、この野原に生い立つすべての草や、石や、木の上にかかる運命でありました。せめても、とこなつの花は、そう思つて、あきらめていたのでありました。かたわらの石や、あちらの脊の高い草は、たとえ風に吹かれても、霧にぬれても、

へいきかお
平気な顔つきをしていたのです。花は、それをうらやましくも、またのろわしいことにもおも
思いました。

二

めずら
珍しく、空の晴れた日でありました。山の頂から高原にかけて、澄みわたった大空
いろ
の色は、青く、青く、見られたのです。

はな
とこなつのは花は、頭を上げて、じつと太陽の光に見入っていました。このとき、青い
そら
空をかすめて、どこからともなく、一羽の鳥が飛んできました。最初は、ほんの黒い点
み
のように見えたのです。そして、だんだんその姿がはつきりと見えました。けれど、それ
たか
は、高く、高くて、鳴いている声すら、とこなつの花のところまでは、かろうじて聞こえ
き
てきたほどであります。

とり
「どこへあの鳥は飛んでゆくのであろう？　そして、あんなに自由に。」と、花は、真紅
はな
の花びらを、風にふるわせながら独り言をいっていました。

とりすがた
すると、その鳥の姿は、ますます、近くなってきたのであります。花は、それを見て不
ふ

思議しぎに思おもっていました。どうして、あの旅たびの鳥とりは、こんなにきびしい殺風景さつふうけいな野原のはらに下おりるのだろうか？ とにかくあの鳥とりは、この野原のはらに下おりようと思おもっているのだと考かんがえました。小鳥ことりは、はたして、花はなの思おもったように、野原のはらに下おりました。しかも、すぐ花はなの咲さいている石いしの上うへにきて止とまったのであります。

この思おもいがけない、まったく理り解かいされないできごとごとに、花はなはどんなにか驚おどろいたのでありましよう。花はなは、つくづくとはじめて見る敏捷びんしょうそうな渡り鳥わたどりの、きれいな羽はねの色いろと、黒くろい光ひかった目めと、鋭すいどがつたつめとをながめたのであります。すると、小鳥ことりはくびをかしげて、かえって花はなよりも熱心ねっしんに花はなを見みつめているのであります。

「あなたは、なにを探さがしに、この野原のはらへお下おりになつたのですか。」と、花はなはたずねました。

このとき、無頓着むとんちやくな石いしは、黙だまって眠ねむっていました。小鳥ことりは、その石いしの頭あたまで、くちばしを磨みがきました。そして、花はなを見守みまもつて、

「私は、あなたを見みつけて、わぎわぎこの野原のはらに下おりたのであります。」と、答こたえました。花はなは、恥はずかしい気きがして、これをきくと、黙だまつてうなだれていました。すると、小鳥ことりは、言葉ことばをつづけて、

「ほんとうにさびしい原であります。どこを見まわしても、赤い花の姿を見ないので。私は、ただ、あなたの姿を見つけたばかりにここへ下りてきました。」

「私は、あちらから飛んできた鳥です。この青い、空の下を、山を越えて旅をしてきました。そして空の下に、身にしみるような悲しい、赤いあなたの姿を見つけたのです。どうか、それについての私の話を聞いてください。」

「私は、海や、山や、町の上を旅して、あてなく空のあなたから、かなたの空へと飛んでゆく鳥であります。悲しいことも、さびしいことも、数あまりあるほどのいろいろなめに遇うてきました。そのなかで、いまでも、この青い空の色を見るにつけて思い出さるるの、北の海の上を幾日も航海したときのことです。あるときは、岸の上に、あるときは、人の住まない島に、また、あるときは、船のほぼしらの上に、身を休めたのであります。そして、くる日も、つぎにくる日も、見るものは、青い、海の色ばかりでありました。」

「そんなときに、遠くゆく、船のほぼしらの頂に、赤い旗のなびくのを見て、私は、どんなに悲しく、なつかしく思ったでしょう。私は、いまあなたの姿を見て、北海が恋しくなりました。あなたの姿は、あの船のほぼしらの頂に、潮風に吹かれて、ひるがえる赤

い旗はたのように、私の胸むねの血潮ちしほをわかせます。あなたがこのさびしい野原のほらに、こうしてひとりで頼たよりなく咲さいていられるのは、あの旗はたが、荒あ々あしい、北ほ海っかいの波なみの間あいだにひらめくのと同おなじだと考かんがえられるのです。あなたは、さびしくはありませんか。」

かく、小鳥こどりは語かたりました。とこなつの花はなは、いつしか涙なみだぐましまでに哀かなしさを自みらの心こころにそそられました。そして、頭あたまをもたげて身みのまわりをながめると、あちらの脊せの高たかい強つよそうな草くさは、無む神しん経けいに、いつもと変わかわらず平へい気きな顔かおつきをしているのであります。

三

とこなつの花はなは、渡わたり鳥どりから、いろいろ世よの中なかの有あり様さまをききました。世よの中なかというものは、かぎりなく広ひろい。そして、こんなさびしい、頼たよりないところばかりが、世よの中なかでないこともきかされたのであります。

小鳥こどりの話はなしによると、よく自じ分ぶんの運うん命めいにも似にているといった、船ふねのほぼしらの頂いただき赤あかい旗はたは、潮しお風かぜにさらされたり、雨あめや、風かぜに打うたれて色いろがあせたり、波なみのしぶきによつて、黒くろく汚よごれが染しみ出でても、それでも幾いく日にちめか、幾いく月つきめか、海うみの上うへに漂うただよたた暁あかつきには、燈ともし

火の美しい、人影が動く、建物の櫛比した、にぎやかな港に入ってきて、しばらくはおちつくことができるのだと知られました。

それにくらべて、なんと自分不幸な境遇であろう。このまま永久に、この野原にいなければならないのかと考えました。花はもうじつとして、それにたえていることができませんでした。そこで、とこなつの花は、小鳥に頼るのであります。

「あなたは、わたしをかわいそうとは思われませんか。もし、このままいつまでもここにいたら、わたしは、さびしさと悲しさのために気がふさいで死んでしまいます。どうか、わたしをにぎやかなところへ連れて行ってください。」と、花はいいました。

鳥は、花のいうことを聞いていました。

「小さな赤い花さん、あなたのお歎きは、もつともだと思えます。しかし、この世の中はどこへいっても、頼りなさとしんがこと、だれでも救われることはないのです。ここにちついておいでなさい。私は、またいつかこの空を通るときに、かならず下りてあなたをなぐさめてあげましょう。そして、いろいろこの世の中で見てきたおもしろい話をしてあげます。あなたは、それをお聞きになれば、見たと同じく感じられるであります。もし、また私が、どんなことで、ふたたびここにくることができなくとも、旅する

鳥とりの中なかで、私わたしとおなじ心こころをもつ鳥とりが、きつと、あなたを見みつけて下おりてくるでありますよ。その鳥とりは、私わたしのように、やさしくいつて、あなたをなぐさめるでありますよ。それをたのしみに、あなたは、このさびしいところに、我慢がまんをしなければなりません。」と、小鳥こどりは答えました。

「小鳥こどりさん、それは無理むりではありませんか。わたしは、この世界せかいじゆうが風かせの寒さむく、霧きりの深ふかいところと思おもつていました。そして、なぜこんな世よの中なかに生うまれてきたらうとやらんでいました。それを、いまあなたから、にぎやかな街まちや、にぎやかな村むらの話はなしをききました。

この世界せかいは、けつしてこれだけでないことを知しりました。どうか、わたしをにぎやかな町まちの方ほうへ連つれていつてください。わたしはただ一目ひとめなりと明あかるい、にぎやかな世界せかいを見みましたら、死しんでもいいと思おもいます。」と、花はなは、重かさねて頼たのんだのであります。

「なにが、あなたの幸こう福ふくになるか、また、不ふしあわせになるかわかりません。」と、鳥とりは、すぐに花はなの願ねがいをばきき入れませんでした。

「小鳥こどりさん、しかし、霜しもが降ふり、雪ゆきが積つもる前まえに、わたしは死しんでしまわなければならぬ身みの上うえです。あなたは、わたしに、さびしい荒あれはた土地とちで枯かれてしまうのが、あたりまえの運命うんめいであるとお考かんがえなさるのですか？　どうか、わたしをにぎやかな町まちへ連つれ

ていつてください。あなたのお力で、それができると思っています。」と、花はいいました。

「私は、あなたをにぎやかな町へ連れてゆくことができます。そして、安全なところに、あなたを置くこともできます。ただ、それが、ほんとうにあなたを、幸福にさせるか、ふしあわせにさせるか知らないのです。」と、小鳥は答えました。

小鳥は、とこなつの花が無理に頼むのを断りかねて、ついに承知をいたしました。小鳥は鋭いくちばしで土を掘って、花をくわえて、地から離しますと、そのまま高く空に舞い上がりました。花は、目をまわしていました。小鳥は、長い間飛んで、その日の晩方、にぎやかな町に着いて、公園に下りると、花を花壇のすみに植えたのでした。

四

小鳥は、おびえた花を公園の花壇のすみのところに植えますと、花を顧みて、

「さあ、あなたのお望みのところへ連れてまいりました。ここはちようど人間の歩くところも見えれば、また話し声もよく聞こえます。そして、ここにいれば安心なのです。あなたは、これからいろいろと世の中の不思議なことを知ることができます。私は、ここ

へ二度とあなたをおたずねするか、どうかはわかりません。あなたは幸福に暮らさないまし。」と、うす暗がりの中から、やさしい、悲しい声で、小鳥はいいました。

公園の木立は、青黒い、夜の空に立っていました。細かな葉が、かわいらしい、清らかな歯を見せて笑っているように、微風に揺らいでいました。花は、あたりのようすがまったく変わってしまったのを知りました。あのさびしい、うす寒い高原から、永久に別れてしまったことが疑われるような、そして、そういうことはあり得ないような、ただなんとなく、おちつきのない気持ちでいましたから、小鳥に対して、十分のお礼やお別れの言葉すらいふことを忘れてしまいました。

「さようなら。」と一声いい残して、小鳥の影は、いずこへともなく飛び去ってしまいました。

花は、不安な、悩ましい一夜を送りました。しかし、花は、「ついに憧れていたところへきた。」と考えると、急に、いきいきとした気持ちになるのです。そのうちに、夜がほのぼのと白んで、太陽が上がった。このとき、花は、どんな光景をながめたでありましょう。

その日から、この花の生活は、一変したのです。花壇には、赤や、黄や、紫や、白

や、さまざまな色彩の花が、いっぱい咲いていました。とこなつのはなは、それらの花をいままで見たことがありません。みんな自分よりは、脊が高く、いい匂いのする美しい花ばかりでありました。どうして、こんなに、いろいろな花がここに植わっているのだろうと怪しみました。あるとき、みつばちが飛んできて、頭の上をゆき過ぎようとして、また立ちもどって、とこなつの花に止まりました。

「なんという、いじけた小さい花だろう。ろくろくこの花には、みつもありやしまい。いったいおまえさんは、どこからきたのですか？」と、みつばちはたずねました。

とこなつの花は、みつばちのさげすむようないい方に対して腹をたてたけれど、忍耐をして、

「わたしは、遠い、高原に生まれて、そこで、雨や、風や、霧にさらされて咲いていました。」と答えました。

「だが、おまえさんをここへ連れてきたのですか、私は、毎日、この花壇の上を飛びまわって、ここに咲いているたくさんな花の一つ一つをみまっていますのですが、つい、おまえさんのお姿を見つげなかった。」と、みつばちはいいました。

「名も知らない旅の鳥が、わたしをここへ連れてきてくれました。」と、花は答えました。

とこなつのは花は、このとき、あの霧の深い、うす寒い風の吹いた、さびしい高原を思い出したのです。そして、あの高原にいたころは、どんなに、この小さな赤い、自分の姿が、美しく思われたか？ 高く、青空を飛びゆく小鳥までが、自分を見つけてわざわざ下りてきたのにと考えますと、いま、この花壇にきて、自分のみすばらしい、いじけた姿が、ほとんど目に入らないほど、きれいな花の間に混じっているのを悲しく、恥ずかしく感じました。

「ここに咲いている花は、みんなどこからきたのですか。」と、とこなつのは花は、みつばちにたずねました。

「西の国からも、南の国からも、また、海のあちらの熱帯の島からもきた。種子や、苗を船に乗せて、人が持つてきたのだ。」と、みつばちは答えました。

とこなつのは花は、考えに沈みました。そして、あの高原の自分のそばにあった黙った石や、また自分のいるところから、あちらにあった脊の高い草の姿などを思い浮かべて、いまはそれすらなつかしく思ったのです。

五

もはや、花は冷たい霧にぬれて、しずくの滴る美しい、なやましげな姿を自ら見ることもなく、また、黄昏がた、高い山脈のかなたのうす明るい雲切れのした空を憧れるかな、悲しい思いもなくなつて、その高原に生まれた花は、まったく、平凡な花に化してしまいました。

ひとり、この花ばかりでなしに、諸国からここに集められた、それらの珍しい花々も、みんな特色を失つて、一様に街頭から風に送られてくるほこりを頭から浴びて、葉の面が白くなつていました。

むし暑い、夏の日の午後の公園は、草や、木さえが疲れて物憂そうに見られました。そして、赤い花や、黄色い花や、紫の花が、たがいにかみ合うようにして、だらけきつて咲いていたのであります。

ちようど、このとき、一人のみすぼらしいようすをした男が、公園の中へ入つてきました。男は、しばらく、ぼんやりとした顔つきで、なにか頭の中で考えてでもいるように、あたりをぶらぶらと散歩していましたが、しばらくすると、花壇の前にやってきました。「百合の花の咲いているところは、どこだろうか？」と、あたりに目をくばっていいまし

た。

花壇かだんには、百合ゆりばかりでも、幾種いくしゆるい類となく集あつめられた場所ばしよがあります。やがて、男おとこは、その前まえへゆきかかると、

「ああ、ここだ。黒い百合くろい ゆりがないだろうか？」と、男おとこはいいながら、百合ゆりの花はなの上うへに目めを向むけて探さがしました。

男おとこは、その中なかから、つぼみの黒い一本ぼんの百合ゆりを探さがし出したのであります。

「これは、黒い百合くろい ゆりでないだろうか？」と、彼かれは、頭あたまをかしげていました。そして、かたわらの木影こかげにあつた、ベンチに腰こしをかけて空想くうそうにふけたのであります。

男おとこには、こんな思おもい出でがあつたのでした。——毎まい年ねん、夏なつになると、その小ちいさいな町まちに、お祭まつりがあるのです。その町まちというのは、この大おおきな都会とかいにくらべてこそ小ちいさいといわれなければならない、子供こどもの時分じぶん、その町まちは、どんなにぎやかなところであつたか。また、なんでも欲ほしいものは、この町まちに、ないものがなかつた。だから、いちばん開ひらけたところであると、ほんとうに、そう思おもわれたのであります。そして、お祭まつりというのは、この町まちにある、ある宗しゅうの本山ほんざんの報恩講ほうおんこうであつて、近きん在ざいから男おとこや、女おんなが出てくるばかりでなく、遠とほいところからもやつてきました。ちようどその人ひとたちが、この町まちに集あつまることによつて、

町じゆうがお祭り気分になつたのです。

見せ物師は、旅からもやつてきました。毎年その日を忘れずに、国境を越えてやつてくるのでした。彼は、ある日のこと、人にもまれながら、寺の境内に入りました。すると、犬芝居や、やまがらの芸当や、大蛇の見せものや、河童の見せものや、剣舞や、手品や、娘踊りなどというふうに、いろいろなものも並んでいました。その中に、女の軽業がありました。この小舎は脊がいちばん高くて、看板がすてきにおもしろそうでありましたから、彼はついに木戸銭を払つて、奥の方に入つてゆきました。

彼は、そこで、どんなものを見たでしょうか。半裸体の若い女が、手にかさを持つて繩の上を渡るのや、はしごの頂で逆立ちをするのや、その他いろいろのものをみました。しかし、それらは、べつに心に深い印象をとどめなかつたけれど、ただひとつ、忘れられないものがあつた。それは、やはり若い女が——桃の実のように肥つた、顔にはげるほど濃く白粉を塗つて、目ばかり大きく黒く、髪はハイカラに結つたのが——堅そうに黒い腹帯をしめて、仰向けに一段高い台の上にて、女の腹の上に、重い俵を幾つも積み重ねる光景であります。

彼は、その女のいきいきとした顔と、赤い唇と、黒い腹帯と、太い短い足とを、どう

いうものか忘れることができませんでした。

小舎の外へ出てからも、町の中を歩いても、この軽業小舎で鳴らしている、ドンチャン、ドンチャンの音が耳についたのです。

六

白いかもめが、晩方になると、北の海の方へ飛んでゆく影が見えて、圃には、切ると内部の真つ赤な、大きなすいかがごろごろとこころげるところになりますと、町のお祭りは近づいたのです。

「腹帯が切れて、南の国の町で、軽業の女が死んだ。」といううわさが、だれか、新聞に書いてあるのを見たものか、彼の耳に入つたときに、彼はびっくりしました。

このときまで、まだ目にありありとあの女の姿が残っていたので、その女が死んだのではないかと思うと、心臓の鼓動が高くなるのを覚えたのです。南の国の町というのは、どんな町であろうか。彼は、明るい空の下に、赤い旗影や、白い旗影などがひらひらとひるがえつて、人影が、町の中を往来する光景などを、ぼんやりと目に描いたので

ありました。

そのうちに、ほんとうにお祭りの日がきたのでした。そして、去年集まった見せ物師らは、また方々から寺の境内に集まりました。軽業の一座もやってきました。彼は、どんなに心の中で楽しみにして、その日を待っていたでしょう。

一年は、こうしてめぐってきた。圃にも、庭にも、去年のその場所に咲いた花が、また黄に、紫に咲いていたのでした。彼は、ドンチャン、ドンチャンとあちらで鳴るにぎやかな音を聞きながら、町を、その方に向かつて歩いていった。やはり人々にもまれながら寺の境内に入ると、片側に高い軽業の小舎があつて、昨年見たときのような絵看板が懸かつていました。彼は、木戸銭を払つてのぞきました。そして、幾人もいる肉襦袢一枚の若い女らの群れから、目に残っている女を探しました。それらの若い女らは、ほとんど人間とは思われないほど、そして、なにかの獣のように、ころころとあたりを転げまわっているのです。しかし、いつかの女を探し出すことができなかつた。彼は耳にしたうわさを思い出して、ほんとうに、あの女が死んだのではないかと思うと悲しくなりました。ちようど、そのときであつた。

「昨年、ご当地で、お目どおりいたしました娘は、さる地方において、俵を積み重ねま

する際に、腹帯が切れて、非業の最期を遂げました。それにつきましても、命がけの芸
 当ゆえ、無事になし終わせました際は、どうぞご喝采を願います。」と、出方がいっ
 た。出方は、いい終わると、拍子木をたたいて小舎の奥へ入りました。

あらわれたのは、脊のすらりとした女でした。彼はどのようなものか、去年ほどの感
 興を惹きませんでした。

「やはり、黒い腹帯が切れて、あの女は死んだのだ。」

彼は、こう思うと、いいしれぬむごたらしさを、かの女たちの身の上について感じたの
 でした。

この日は、町は、いつもと異なつて、いろいろの夜店が、大門の付近から、大通り
 にかけて、両側にところ狭いまで並んでいました。

彼は、四つ角のところ、さまざまの草花を、路の上にひろげている商人を見ま
 した。そこから、広い、大通りをまっすぐにゆけば、やはりにぎやかだつたが、裏町
 の方へゆく道は、前後とも、火影が少なくなつて、暗く、溝のくぼみのように、さびしげ
 にさえ見られました。ダリアの花や、カンナの花や、百合の花などが、カンテラの火にゆ
 らゆらと浮き出したように照らされているのが、ちょうど艶麗な女が、幾人も立つて

いる絵姿えすがたを見るみような気がきしました。そして、なかには、朽くちかかった花はなびらがあつて、だらりと出だした舌したのように、ながく垂たれているのです。

「この黒くろい花はなは、なんだろう？」

一本ほんのひよろひよるとした、茎くきの頂ただきに、重おもそうに咲さいているのを指さして、彼かれはたずねた。「黒くろ百合ゆりです。」と、商しょう人にんは答こたえました。

彼かれは、黒くろ百合ゆりの花はなを見て、魅みせられたような気がきした。ちょうどこのとき、女おんなの黒くろい腹はら帯おびが頭あたまの中なかに思おもい出だされた。しかし、気き味みが悪わるかったので、買かわずに帰かえりました。その後のちになつて、黒くろ百合ゆりは、北ほっかい海かい道どう辺へんに、まれにあるときいうことを聞ききました。あまり、縁えん起ぎのよよい花はなでないといいうことも聞きいたのです。

七

彼かれは、その後のち、いろいろの経けい験けんをし、また苦く勞ろうをしました。たまたま、この公こう園えんにきて百ひゃく合ごうの花はなを見みて、昔むかしのここを思おもい出だしたのです。

とこなつつの花はなは、いつままでも、男おとこが側そばのベンチから去さらずに、それそに腰こしをかけて考かんえ込こ

んでいるのを見ました。花は、小さくびをかしげて、男が、「黒い百合の花が、咲いてはいはしないか？」といったのを聞いて、高原の景色を思い出しました。とこなつの花は、かつてあの高原にいたけれど、黒い百合の花を見たことがなかったので、脊伸びをして、その花を見ようとしました。けれど、地面にはついている真紅の花には、あちらの百合園に、たった一本まじっている、黒い百合の花が見えなかったのです。

そのうちに、日が暮れかかった。木々のこずえが、さやさやと鳴りはじめて、空の色は、青黒く見え、燈火の光がきらめき、草の葉や、木のこずえに反射しているのが見られたのです。男は、ベンチから立ち上がりました。

「黒い百合の花が咲いた時分に、またやつてこよう。こちらの空には、どうして、星の光が、こう少ないのか？ 故郷にいる時分は、毎夜、降るように、きらきらと輝く星が見られたのに……。」と、立ち去るときに男はいいました。

とこなつの花は、なるほど、男のいうように、どうしてこつちにきてから星の光が見えないかと気がついて、怪しみました。あの高原にいるころ、暁の風が、頭の上の空を渡り、葉末に露のしずくの滴るとき、星の光が、無数にきらめいていた。それが、たがいに追いかけて合つてもいるように、金や、銀や、青や、赤の星がきらめいていた。そして、

いつともなしに時がたつと、みんな影を地平線のかなたに没してゆく。

翌日は、とこなつの花は、朝のうちから、空模様がおかしく、暴風のけはいがするのを身に感じました。

昼ごろ、せんだつてのみつばちが、どこからともなくやってきて、花の上に止まりました。

「どうなさいましたか？」と、とこなつの花は、みつばちに声をかけました。すると、みつばちは、

「今日は風ですよ、なんだか天気がおかしくなりました。こういう日は、高い脊の花に止まっているのは危険です。いくら香気があつても、またきれいに咲いていても、風といつしよに吹き飛ばされたり、折れた下になつたりしては、たまりませんからね。今日は、あなたのところに置いてくださいまし。あなたは、脊が低く、地面についていますから、ここなら危ないことはありません。あの雲ゆきの早いのをごらん下さい。」と、花に向かつていいました。

「花は、頭を上げて空を見ました。」

「ほんとうに、そうですね。」

「あなたは、黒い百合の花をござんになりましたか？」と、とこなつの花は、みつばちにたずねました。

みつばちは、小さな、すきとおるような、美しい羽をふるわして、

「黒い花ですって？ 私どもは、黒い花は、人間の死骸から、生えたのだといっています。そして、毒があるといつて、けつして止まりはいたしません。めったに、黒い花はなにものです。なんでも黒い花を、ただ見ただけでも悪いといっていますよ。」と答えました。

とこなつの花は、これを聞くと、くびをすくめました。そして、男のいったことから、脊伸びをして、この近くに咲いているのを見ようとしたことを思い出して、思わずぞつとしました。

「なんで、そんなことをお聞きなさるのですか？」と、みつばちはたずねました。

「いいえ……。」「と、とこなつの花はいつて、黙ってしまいました。

ますます風の吹くのが、強くなりました。

「今日は、公園に、なにかあるのでしょうか。」と、花は、先刻から風の中を人々が、ぞろぞろと花壇のまわりを歩いているので、なんでもこの付近のできごとなら、知らないものがないほどくわしいみつばちに向かつて、たずねました。

すると、みつばちは手足をたがいにこすりあいながら、

「農産物の展覧会があるのですよ。花の咲いている時分は、私も広い圃から、圃を渡つて飛び歩いたものです。なにしろ、二里も先まで、いったのですからね。それが、日数がたつにつれて、それらの野菜は、太い根を持つたり、また、まるまると肥えたり、大粒に実つたりしましたからね。大根や、ねぎや、豆や、芋などを昨日から、近在の百姓たちが会場に持ち込んでいますよ。そして、一等と二等とは、たいした賞品がもらえるということです。」と、みつばちは答えました。

ほんとうに、公園はいろいろの人たちでにぎわっていました。あちらから楽隊の鳴らしている楽器の音が、風に送られて聞こえてきたり、また、歌をうたっている声が聞こえてきたりしました。

この日、白髪のおばあさんが、農産物展覧会場へあらわれました。

おばあさんは、なにも農産物に興味をもったわけではありません。場末の町に住んでいるのだけれど、用事があつて、こちらの知つた人のところへやつてきますと、その人の家で、展覧会のある話を聞きました。

「大根でも、なすでも、芋でも、なんでもよくできたものには、一等、二等と礼がついて賞が出る。」ということを知ると、ふと、おばあさんは、胸に思い出したことがあります。

「その展覧会は、どこにあるのですか？」と、おばあさんはたずねました。

「じき、近くの公園ですよ。まあ、いつてごらんなさい。それは、大きななすや、みごとなきゅうりや、野菜物はなんでもありますから。大根なんか、どうしてあんな太いのがあるかと思われほどですよ。」と、知つた家の人はいいました。

おばあさんは、その話を聞くと、いそいそとして、その家から出て、公園へやつてきました。公園のこの展覧会場は、楽隊で、人を呼び寄せていました。そして、ここでは、わずかな日数を限つて、その間は、野菜物を安く売るのでありました。おばあさんは、内へ入ると、どの出品物にも目をくれずに、すぐに大根の並べてあるところへいつてみました。するとそこには、白い、太い、大根がいろいろと並べてあつて、

その中のいちばん太いのふとに、赤い紙札あかかみふだがついて、「一等賞とうしょう」と書いてありました。なんでも、一等賞とうしょうは、たいしたほうびがもらえるらしいのであります。それを見るみと、おばあさんは目をまるくしました。

「おや、これが一等賞とうしょうかい？」と、独り言ひとりごとをいいました。

じつは、おばあさんは、今朝けさ、すぐ自分の家の近くの八百屋やおやで、大きな大根だいこんを見てびっくりしたのです。いままでの、長い年月ながとしつきに、おばあさんは、たくさんの大根だいこんを見たけれど、いまだにこんな大きなのを見たみことがなかったのです。

「まあ、大きな大根だいこんだこと。」と、そのとき、おばあさんはいいいました。

「私も長い間八百屋やおやをしていますわたしながあいだやおやが、こんなのを見たみのは、はじめてです。」と、八百屋やおやの主人しゅじんもいいました。

おばあさんは、展覧会てんらんかいにきて、一等賞とうしょうをとった大根だいこんを見つめて、これよりは八百屋やおやの店頭みせさきにあったのが大きいおおと思いました。

「まだ、あの大根だいこんは売れずうにあるだろうか。あれを持ってもここへ出せば、あのほうだが一等賞とうしょうだ。」と、おばあさんは思おもいました。そして、いそいで、外へ出ると、電でん

車に乗ってゆきました。

三、四時間の後、おばあさんは、大きな二本の大根を持って、展覧会場に現れました。

係のものは、驚きました。それは、一等の出品物よりたしかに大きく太かったからであります。

「おばあさん。ほんとうにみごとな大根ですね。」と、係のものはいいました。

九

「おばあさん、圃の土は、赤土ですか、黒土ですか。」と、係のものは問いました。

「黒土でございます。」と、おばあさんは答えました。

「種子はどこから取り寄せて、何月の何日に圃にまいて、いつ肥料を何回ぐらいやったのですか、どうか話してください。」と、係のものはいいました。

そんなことを問われると、おばあさんは、自分が圃に作った大根でないから、ちっともわかりませんでした。ただ、もじもじとしていて、答えることができなかったものであり

ます。

「おばあさん、あなたがお作りになったのではないでしょう。」と、係かかりのものはいいました。

「私は、八百屋にあるのを買ってきました。しかし、これは私のものです。」と、おばあさんはいいました。

「それでは、いけません。買ってきたものは、いけません。」と、係かかりのものは、頭あたまを振りながら答えました。

「なぜですか。こんなに大きいのが、なぜいけません。私の持つてきた大根だいこんが一等とうしょう賞しょうでございませす。」と、おばあさんは、白髪頭しらがあたまをふりたてて怒り声いかごえでいいました。

係かかりのものは、これを聞くと笑わらいながら、

「たしかに、この大根だいこんは、一等とうしょう賞しょうの資格しかくがあります。けれど、作り手がわからないから、賞品しょうひんを渡すわけにはいきませせん。」といいました。

「作り人は、だれでも、私が買ったのだから、この大根だいこんは、私のものでございませす。賞品しょうひんは、私がもらいます。」と、おばあさんは、それになんの不思議ふしぎがあろうかといわぬばかりにがんばりました。

しかし、係かかりのものは、頭あたまを振りふりました。

「いいえ、賞しょう品ひんは、野菜やさいを作つくった人ひとの手柄てがらをほめてあげるの、その他たの人ひとには、だれにも渡わたさないので。この大根だいこんを作つくった百姓ひとは、どこのだれという人ひとだか、おばあさんにはわかりますまい。みごとな大根だいこんですから、ここに並ならべておいて、みんなに見みせるのはさしつかえないから、二、三日貸にちかしておいてください。」と、係かかりのものはいいました。おばあさんは白目しろめを向むけて、係かかりのものを見みながら、

「よく、そんなことがいわれたものだ。これは私わたしのものだから、ほうびをくれぬなら、さつさと持もって帰かえりますよ。較くらべて見みれば分わかるものを、賞しょうをくれぬのを惜おしんで、ただ貸かしてくれいもないものだ。」と、欲張よくばりのおばあさんは、ぶんぶんと怒おこって、大きな二本ほんの大根だいこんを抱かかえて、会場かいじょうの入り口いぐちから出でました。

黄昏たそがれ方の空そらは、水みずあめのような色いろをしていて、ひどい風かぜが、ヒューヒューと音おとをたてて吹ふいていました。電線でんせんはうなつて、公園こうえんの常磐木ときわぎや、落葉樹らくようじゆは、風かぜにたわんで、黒くろい頭あたまが、空そらに波なみのごとく、起伏きさくしていました。

おばあさんは、二本ほんの葉はのついてある大きな大根だいこんを抱かかえて、ちようど、赤あかい旗はたを、監か督とくが振ふっている電車でんしゃの交叉点こうさてんの方ほうへと歩あるいていきました。

風は、いくたびもおばあさんを吹き倒そうとしました。おばあさんは、二本の大根をしつかりと抱いて、風に吹き倒されまいと歩きました。風は、おばあさんの白髪を波立たせ、大根の葉を吹きちぎりそうに、もみにもんだのであります。

そのうちに、ピューツときた風は、とうとうおばあさんを倒してしまいました。おばあさんは、大根を抱えたまま、起き上がろうとしましたが、風が強くて起き上がることができませんでした。そのうちに、通る人々が、黒くなつて、そのまわりに集まつてきました。

「みつばちさん、あちらが、たいそう騒々しいですね。」
と、とこなつたの花は、みつばちにいいました。

「じき、この鉄さくのあちらは往來です。いつてみてきましょう。」と、みつばちは答えて飛びゆきました。

やがて、みつばちはかえつてきて、花の上に止まると、

「どこかのおばあさんが転んだのを、しんせつに人が起こしてやると、おばあさんの抱えていた一本の太い大根が、二つに折れたといつて、おばあさんが怒っているのですよ。」
といいました。

十

翌日よくじつになると風かぜは静しずまりました。朝あさ早くから、まだ太陽たいようの上あがらないうちに、みつばちは起きて飛とぶ用意よういをしました。

「私はわたし、昨日きのうは一日いちにちにも食たべなかつた。今日きょうは腹はらがすいてたまらないから、大きな花はなを尋たずねまわって、うんとみつを吸すってこなければなりません。じゃ、さようなら。また、お目めにかかります。」と行って、とこなつはなの花はなに別わかれを告つげていこうとしました。

とこなつはなの花はなは、黙だまっていました。いざみつばちが飛とび去さろうとするときに、それを呼よび止とめて、

「みつばちさん、いくら腹はらがすいていても、けつして、黒くろい百ひゃく合ごうの花はななどに忘わすれても止とまつてはいけません。お気きをつけなさいまし。」といました。

「ごしんせつに、ありがとうございます。気きをつけます。」と行って、みつばちは、元げん気きよく、朝あさの空くう気きの中なかを、羽はねを鳴ならして飛とんでゆきました。

その日ひは、昼ひる過ぎから、夜よるにかけて、雨あめが降ふりました。そして、雨あめは、じきにやみまし

た。すると、すがすがしい気分が、あたりに漂って、ぬれた木の葉や、草の葉が、そこに立っている電燈の光に照らされて、きらきらと輝いています。

とこなつの花は、みつばちが、夜になっても、帰ってこないのです、どこで眠つたろうと考えていました。風が、さやかに吹きわたると、木々の露がぼたぼたと地上に落ちました。いつしか快い気持ちになって、花は眠りますと、ふいに、夜中に、ひやりとなにか身を感じたので、驚いて目をさましたのであります。

花は、おそくなつて、みつばちが帰ってきて、ぬれた体を触れたのだと思いましたが、さしてくる電燈の光で見ると、それは、みつばちでなくて、羽の黄色な、小さいのがつた形をした蛾でありました。蛾の黄色なすきとおるような羽は、気味の悪いほど、冷たく、硫黄の色のように見えたのです。花は、高原にいる時分に、たくさんの蛾をば見ました。しかし、この蛾と同じ感じのするような蛾をば見なかった。この蛾は、人間の目を見るように、くるくるとした二つの目を持っていました。

花は、蛾に対して、なにもいう気にはなれなかったが、しかし、知らぬ顔をしていることもできなくて、

「黄色な蛾さん、いまごろ、あなたは、どこから飛んできたのですか。私は、まだあなた

のような姿の蛾を見たことがありません。山からですか？ 野原からですか？ どこから、

あなたは飛んできたのですか。」と、たずねました。

蛾は、ちょうど体の色にふさわしい、冷たい、すきとおる声で答えました。

「私たちは、戦場で産まれました。たくさんの人間が死んだ、その死骸が腐っている広い野原の中で産まれました。私たちは、明るい日の光や、火や、炎を見ることは大それたことです。真つ暗な闇が大好きなのです。私たちは風の吹く日に、暗い野原から野原へ、町から町へ飛んでゆきます。そして、みんな火という火を消してしまいます。明るい街を、真つ暗にしてしまうのです。それがために、私たちは、自身の体が火に焦げても、また死んでもいいはいたしません。明るいいということは、死よりも恐ろしいのです。」と、蛾は、くるくるとした二つの目で花を見守りました。

「そんなに、あなたがたは、たくさんいつしよになって、旅をなさるのですか。」と、花は問いました。

「幾十万、幾百万、その数はわかりません。私たちは、太陽の輝いている空も暗くすることができません。また、どんなにぎやかな明るい街の火でも暗くすることができません。私たちは、昨夜、海の上を渡って、南の国へゆこうとして、風のためにわずかばかりが迷

つて、この方向に飛んできました。いまに、その私たちの仲間が、ここの空を過ぎるで
ありましよう。―と、蛾はいいました。

花は、頭をあげて、そばに立っている、電燈の光を見ますと、蛾が幾つも止まっているのでした。

十一

花は、たちまちのうちに、無数の黄色な蛾が飛んできたのを見ました。どの木の葉にも、
またどの草の葉にも、蛾が止まっていました。ちょうど花びらの降りかかったように見え
たのです。

急に、さわさわという音がして、燈火の光がうす暗くなったと思つて、立っている電
燈の方を見ると、幾百、幾千となく蛾が火を目がけて襲つたのです。そのために、光を
さえぎつたので、中には、ガラスに頭を打ちつけて、下に落ちる蛾や、火のまわりを、す
きもあろうかと、羽ばたきをしながらまわるのや、いろいろありました。このとき、あち
らに立っている電燈を見ても、同じような光景でありました。そして、羽の白い粉が、

火の周囲の空間を、光ったちりのまかれたように散っているのです。花は、いま蛾のいったことを思い出して、蛾の仲間が、ようやくここへやってきたのだと知りました。

この都会の火を消すために、蛾が襲ってきたのです。とこなつの花は、このたくさんな数えきれないほどの黄色の蛾が、いずれも二つのくるくるとした、円い人間の目のような目を持ち、長いひげと大きな口を持つているかと思うと、ぞっとするほど、恐怖を覚えたのです。で、目を閉じて、見まいとしていました。

そのうちに、待ち通しかつた夜が明けかかった。花は、うなされながらも、いくらかは眠ったような気持ちもしました。しかし頭は重かつたのであります。

花は、あたりが明るくなると、自分の体の上にと止まっていた、黄色な蛾が、いないのに気づきました。そればかりでなく、頭を上げて、あたりを見まわしますと、あれほどたくさんに飛んできた蛾が、影も形もないのに驚いたのであります。

「昨夜のは、みんな夢だったろうか？」と、花は、怪しまざるを得なかつたのでした。

敏捷で、自由で、伶俐で、なんでもよく知っているみつばちは、きつと昨夜のどきごとも知っているであろう。はやく、みつばちが、やってきてくれないものかと、花は、待つていましたが、その日は、みつばちはついにきませんでした。

高原こうげんに生まれうたれた花はなは、この街まちの中なかにきてから体からだがたいそう弱よわりました。朝晩あさばん、冷やひやかな露つゆを吸すわないだけでも、元氣げんきをなくした原因げんいんだつたのでした。それに、むし暑あつい日ひがつついたので、頭あたままでがいきいきとせずおもに重おもくあつたのです。

とこなつの花はなは、高原こうげんにいて、あの寒さむい、雪ゆきの積つもる冬ふゆにあうことをおそれましたが、ここにきてから、こんなに早はやく体からだが弱よわつてしまつては、秋あきを待またずに枯かれてしまうようにさえ思おもわれました。

「ああ、わたしも、もう先さきが長ながくあるまい。」と、花はなは、自みづからも考かんがえました。そして、昼ひる間まも、うつらうつらとした氣持きもちで、居眠いねむりをつづけているようになりました。

周しゅう囲いの常磐木ときわぎの葉はに、強つよく照てりつけた太陽たいようの光ひかりも、このしほみかかった、哀あわれな花はなの上うへには頼たよりなげに照てらしたのです。ちようど、この花はなに映うつつた太陽たいようの光ひかりは、燐りんの炎ほのおのように青あお白しろくさえ見みられました。

だれかつぶやいている声こえがしたので、ふと花はなは、目めをさましますと、もう日ひは暮くれていました。そばにあつたベンチに腰こしをかけている人にんげん間は、たしかに、せんだつて、黒くろい百合ゆ合がの花はなを探さがしていた男おとこであります。

「なぜだか、あの笛ふえの音ねを聞きくと、私わたしは、お母かあさんと、あの山やま奥おくの温泉場おんせんばへいったと

きのことが目にうかんでくる。あの時分は、お母さんは達者で、自分は、まだ子供だった。未開な温泉宿では、夜は谷川の音が聞こえて静かだった。行燈の下で、毛ずねを出して、男どもが、あぐらを組んで、下を向いて将棋をさしていた。」

男は、こう独り言をしていました。

もう、空は暗かったので、花には、男の顔がわからなかった。ただその声に聞き覚えがあっただけです。公園の鉄さくの外を按摩の吹いて通る笛の音が、細く、きれぎれに聞こえてきました。

その後は、ベンチによりかかった男のため息ばかりが、闇の中でしたのであります。

十二

翌日の朝は、いい天気でした。白い雲が、静かにこずえの頂を離れて、空に流れていました。とこなつのは花は、ぐつたりとしていました。そして、いつになく元気がなかったのです。どこからかみつばちが飛んできました。

「いい天気じゃありませんか。」といって、花に声をかけました。

「昨夜は、恐ろしい夢を見て、今日は、頭が重くてしかたがありません。」と、花は答えました。

「どんな夢をごらんになりましたか？　ほんとうに顔の色がよくありませんね。あなたは、だいぶん疲れておいでのようですから、お大事になさいますし。」と、みつばちがいました。

とこなつの花は、一昨夜、黄色な蛾がきたことを語りました。すると、みつばちは、花のいうことを半分も聞かずに、

「なんで夢のもんですか。みんな事実ですよ。この公園には、黒い百合の花が咲いたり、不思議な毒蛾がきたりしたために、人間が大騒ぎをしていますよ。あなたは、まだなんにもお知りになりませんか。」と、みつばちはいいました。

とこなつの花は、これを聞くと、

「黒い百合の花が咲いたのですか？」とたずねました。

「百合園に、一本咲いています。それで、今日あそこへ植物学者がきて調べています。後ほどここへもあの人たちは、やってくるでしょう。」と、みつばちはいいました。

とこなつの花は、なんとなく胸騒ぎを感じた。

「みつばちさん、そんなら、一昨夜、たくさんきた蛾は、毒蛾なんでしょうか。」と問いました。

「毒蛾ですとも、昨夜、ついこのベンチに腰をかけていた男が、あの蛾に刺されたのです。そして、病気になったというので、やはり学者が、今日この公園にきて、蛾を探しています。しかし、あれほどいた蛾が、不思議なことに、一匹も見つかからないですよ。」と、みつばちはいいました。

とこなつのはなは、このそばのベンチに腰をかけていた男が、蛾に刺されて病気になったということを聞いて、びつくりしました。

「なんという、あの人は、不しあわせの人なんでしょうね。」と、花は、あの男が独り言していたことなどを思い出しながらいいました。

「その男は、なんでも昼間黒い百合の花を折ろうとしたのです。それを番人に見つかつて、しかられたのです。男は、夜、ここへやつてきました。すると、一昨夜、この都を襲つた毒蛾が、どこかに残つていたとみえて、その男を刺したのです。それで男は、毒が身体にまわつて、なんでも死にそうだといいますが、私は、黒い百合の花に触れたのではなにかと思います。」と、みつばちは答えた。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「朝日新聞」

1922（大正11）年6月26日～7月10日

※表題は底本では、「公園《こうえん》の花《はな》と毒蛾《どくが》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

公園の花と毒蛾

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>